

私わたしの事こと

泉鏡花作

大正九年七月

打うち續つづく蒸暑むしあつさ。漫歩そぞろあるきして立寄たちよらば、恚かる時とき、色いろも香かも涼すずしかるべき、清水谷しみづだにの紫陽花あざさみも見みに行ゆかず。今日けふは又また夕方ゆふがたより、向島むかじま百花園くわえんなる喜多野家きたのやの別荘べつさうにて、幹事かんじは岡田をかた八千代やちよさんとて、螢ほたるに打水うちみづの露つゆと云いふ、優やさしき會くわいの催もよほしあるさへ、俾くま？ を馳はせざる本意ほんいなさよ、否いな卑怯ひけふさよ。私わたしは宿醉ふつかゑひのためと言いへど、彼處かしこに集あつまる豪傑がうけつれん連れんは、心掛こころがけの悪わるい奴やつ、盆前ぼんまへゆゑと憐あはれむはまだしも、意地いぢの悪わるいのは、蠅はへを可恐こはがると嘲あざけるなるべし。豈あには蠅はへなどを恐おそれんやと、繪團扇ゑうちまの張はり肱ひぢしながら、蚊遣香かやりかうをむら／＼と燻いぶして、半減はんげんの晩ばんし酌やくに、肴さかなは細隠元豆ほそいんげんの玉子綴たまごどぎたべものゝ其その可愛かほゆきこと處女しよぢよと言いふべし。焉いづくんぞ知らん、此この處女しよぢよ、節季せつきの勘定かたぢやうに平たいかならず、籐椅子とうすの古ふるいのに微醉ほろゑひのじだらくして、偶ふと田岡嶺雲たをかれいうんの數奇傳さくきでんを讀よむ。渠かれが其その戀こひを自叙じじよして、(月見草つきみさうのやうな女をんな)と、山峡さんけい、津つや山川まがはの夏なつの月つきに、露つゆに袂たもとを絞しぼる處ところ、ページを翻ひるがへして

涼氣颯。
れうきさつそう。

(十二日夜)